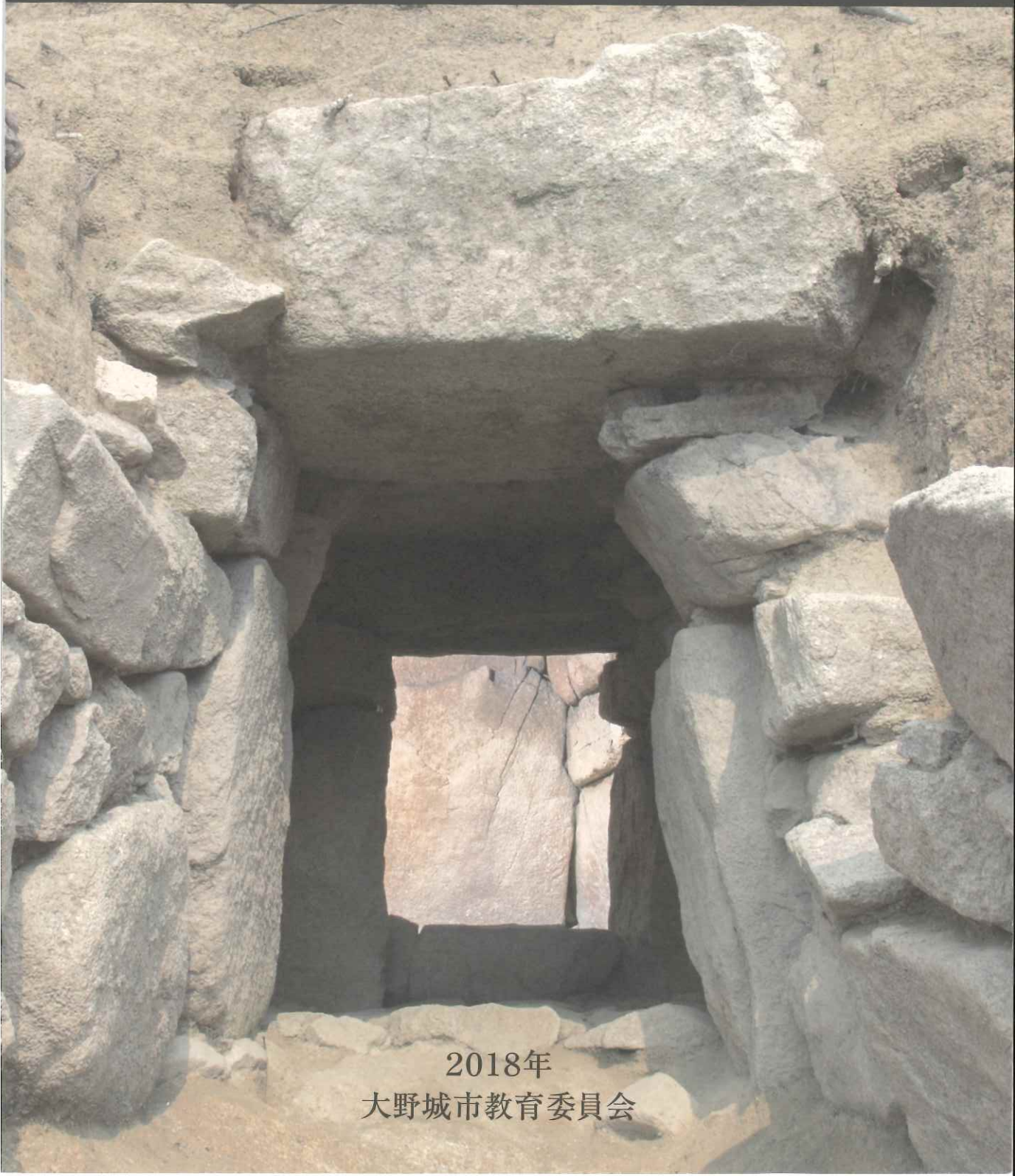


# 大野城市の文化財

第48集

大野城市の遺跡⑫ 乙金地区遺跡群総集編



2018年

大野城市教育委員会

## 序

10年間におよぶ調査・研究の成果を収録した「大野城市の文化財」が完成しました。今回は乙金第二土地区画整理事業に伴い発掘調査を行った「乙金地区遺跡群」について紹介します。

乙金地区では事業面積が41.5ヘクタールにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成19年度より発掘調査に着手しました。発掘調査では旧石器時代から近世・近現代に至るまでの様々な遺跡が発見されております。本書ではこれまでの調査成果について古い時代から新しい時代へと順を追って報告し、乙金地区の歴史を紹介したいと思います。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、過去の人々がいかに生きてきたかを伝えるとともに、我々もまた歴史の中に生きている、ということを教えてください。本書が過去の人々の営みを現在、さらには未来へと伝えていくために、少しでも役立てれば幸いです。

平成30年3月30日

大野城市教育委員会  
教育長 吉富 修

## 目次

1. 乙金地区遺跡群の位置と周辺遺跡	1
2. 豊かな自然資源と人々の関わり - 旧石器・縄文・弥生時代 -	2
3. 大開発の時代と乙金古墳群 - 古墳時代 -	3
(1) 乙金古墳群の萌芽 - 古野古墳群の出現 -	3
(2) 集落の出現と展開	4
(3) 渡来人とモノづくり	5
(4) 乙金古墳群の成立	6
4. 激動の7世紀と乙金地区遺跡群	9
(1) 東アジアの動乱と大宰府都城の成立	9
(2) 乙金地区遺跡群と四王寺山（大野城跡）の関係を語るもの	10
5. 律令社会の成立と役人たちの姿 - 奈良時代～平安時代前期 -	11
6. 再び大開発の時代 - 平安時代後期～鎌倉・室町時代 -	12
(1) 未来へのタイムカプセル - 古野遺跡経塚・経筒 -	12
(2) 中世の開拓者たち - 居館と高階層墓の展開 -	13
7. 今に残る江戸時代の文化財と風景 - 近世～近代の乙金村 -	14
8. 戦争遺跡から平和を思う - 太平洋戦争と乙金村 -	15
9. おわりに - 次へのはじまり -	16



# 1. 乙金地区遺跡群の位置と周辺遺跡

乙金地区遺跡群は大野城市東部の乙金・乙金東一帯に広がる遺跡群です。地理的には福岡平野の東南部に位置し、沿岸部からは10kmほど南の内陸部にあたります。福岡平野東南部の四王寺山脈には北側に突き出たような乙金山があり、乙金地区遺跡群は乙金山のふもとを中心に広がっています。



第1図 乙金地区遺跡群の位置

善一田古墳群<sup>ぜんいちだ</sup>・王城山古墳群<sup>おうぎやま</sup>・古野古墳群<sup>ふるの</sup>などを中心とした大きな群集墳である「乙金古墳群」や乙金窯跡<sup>かまあと</sup>・雉子ヶ尾窯跡<sup>きじがお</sup>といった焼き物の窯のほか、人々が暮らした集落の遺跡である薬師の森遺跡<sup>やくし</sup>があります。なお、665年に築造された日本最古の朝鮮式山城である「大野城跡」<sup>おののじょうあと</sup>のふもとに位置していることも大きな特徴です。



第2図 乙金地区遺跡群の遺跡分布



写真1 乙金地区遺跡群と四王寺山脈



写真2 乙金地区遺跡群の位置

## 2. 豊かな自然資源と人々の関わり－旧石器・縄文・弥生時代－

### (1) 旧石器時代

乙金地区で人々の生活が始まるのは一万数千年前以上、まだ氷河期であった旧石器時代にさかのぼります。ナイフ形石器<sup>1)</sup>や石核<sup>2)</sup>などが見つかっており、大型の野生動物を追って狩りをして



写真4 縄文時代の石器

いた人々がいたことを物語ります。  
(2) 縄文時代 氷河期が終わり温暖な気候となった縄文時代、乙金地区では矢の先につける「石鏃」<sup>3)</sup>がたくさん見つかったほか、鹿や猪を狙った「落とし穴」も複



写真3  
旧石器時代の石器

数あることから、縄文時代においても活発な狩猟活動を行っていたことがわかります。

### (3) 弥生時代

乙金地区は日本最古の農村とも称される福岡市板付遺跡からも近く、弥生時代が始まったばかりの頃の土器が見つまっていることから、いち早く弥生文化が及んだことを物語ります。ただし、継続的に生活したわけではなく、一時的に居住していたようです。



写真5 弥生時代開始期の土器

ところで、弥生時代の様子を伝える興味深い資料があります。写真6は太形蛤刃石斧<sup>ふとがたはまぐりばせきふ</sup>という木を切り倒すための斧で、乙金地区の山麓部を発掘調査していると、時々こうした石の斧が見つかることがあります。弥生人たちが乙金山の森の中にしばしば訪れていたことを物語る資料です。



写真6 弥生時代の伐採斧

以上のように、旧石器～弥生時代の人々は、動植物などの自然資源を巡り山麓部の土地利用をしていたことが分かりました。

※1) 槍の先に装着したり毛皮や獣肉を加工するための道具。

2) 石器の原料となる石の塊。

3) 縄文時代になると大型獣に代わって小型の動物が狩猟の対象となり、飛び道具である弓矢が発達する。



### 3. 大開発の時代と乙金古墳群－古墳時代－

この地に人々が定住し、様々な営みが始まるのは古墳時代を待たねばなりません。古墳時代になって大規模な開発が行われる背景には、旧石器時代以来の豊富な自然資源があったことも一つの要因であったのでしょう。

遺跡の形成が本格化する5世紀には、古野古墳群で多数の古墳が造られました。6世紀中頃～後半には集落が出現し、大規模な開発を行うとともに、山麓部では乙金古墳群が出現しました。7世紀には東アジアが激動の時代を迎え、白村江の戦い（663年）や水城（664年）・大野城（665年）が築造される頃、乙金地区では古墳が造られなくなっていき集落も縮小していくことから、新たな時代へと変化していくことを物語ります。



写真7 古野古墳群全景

ここではまず、大開発の時代の直前にあたる5世紀の様子についてみていきましょう。

#### (1) 乙金古墳群の萌芽－古野古墳群の出現－

古野古墳群は乙金宝満神社北側の見晴らしの良い丘陵上にあります。乙金古墳群の中で最も早くに始まる古墳群で、5世紀後半からたくさんの古墳が造られました。

このうち8号墳からは、青銅製の鏡（四禽文鏡）・青銅製の鈴や鉄剣・鉄鏃のほか農工具（鋤先・鉄斧・鉄鎌）、数百点を越えるガラス玉が未盗掘の状態で見つかりました。同じ時代の周辺古墳では、これほど豊富な副葬品を持つものは見つからないことから、5世紀後半にはこの地域に有力な人物がいたと考えられます。



写真8 古野古墳群8号墳石室



写真9 8号墳の副葬品



写真10 四禽文鏡



写真11 四禽文鏡  
3次元計測画像

## (2) 集落の出現と展開

乙金地区で本格的に人々の生活が始まるのは6世紀中頃以降のことです。まずは日常生活をした場所である集落の様子をのぞいてみましょう。

集落が始まる6世紀中頃では、善一田遺跡・古野遺跡・原口遺跡<sup>はるくち</sup>・薬師の森遺跡<sup>たてあなじゅうきよ</sup>で数軒～5軒程度の竪穴住居（家）を一つのまとまりとした集落が見つかっており、乙金山麓の広範囲で小さな居住域が複数営まれていた風景を復元することができます<sup>1)</sup>。なお、善一田遺跡の一角にある善一田池のほとりでは、石製の玉<sup>たま</sup>などを用いたお祭りをしたことが分かっており、この地を開発するに際し、土地の神様<sup>しず</sup>を鎮めるようなお祭りがあったようです。

6世紀後半になるとそれまでの集落が消滅し、薬師の森遺跡が一つの大きな集落としてまとまっていき、7世紀前半にかけてピークを迎えます。村の中の一部には朝鮮半島から渡って来た渡来人<sup>とらいじん</sup>も住んでいて、鉄器作りや焼き物作りをしていたことが分かりました。



写真12 薬師の森遺跡と四王寺山



写真13 祭祀に使用した道具



写真14 古墳時代の土器



写真15 古墳時代の竪穴住居

※1) 遺跡に残された花粉を分析した結果、6世紀中頃前後には山麓部の樹林が伐採され、草草が広がっていたことが分かっており、大規模な開発があったことを物語る。



### (3) 渡来人とモノづくり

古墳時代の集落にはどのような人々が住んでいて、どのような暮らしをしていたかを見ていきたいと思います。

**渡来人が住む村** 薬師の森遺跡では、算盤玉形陶製紡錘車<sup>1)</sup>や有溝把手付土器<sup>2)</sup>、土器棺墓<sup>3)</sup>や溝付住居<sup>4)</sup>など朝鮮半島系資料<sup>5)</sup>がたくさん見つかっており、一部に渡来人が住んでいたと考えられます。

**鉄づくりと土器づくり** 薬師の森遺跡では鉄滓（鉄・鉄器づくりの際に生じる廃棄物）やふいごの羽口（炉の温度を上げるための送風管）が多数見つかることから、集落の中で鍛冶（鉄器生産）を行っていたと考えられます。



写真16 朝鮮半島系資料



写真17 鉄滓



写真18 ふいご羽口

また、乙金地区の北側には乙金窯跡、南側には雉子ヶ尾窯跡など須恵器を焼いた窯があり、この地域の人々が焼き物作りも行っていたことが分かります。乙金地区の窯跡で生産した須恵器の中には、朝鮮半島の土器に似たものもあることから、焼き物づくりに渡来人が関わったと考えられます。これらの類似品は朝鮮半島の中でも新羅の土器に似ており、渡来人たちがどこからやってきたかを推測するための大きな手がかりにもなる重要な資料です。



写真19 乙金窯跡



写真20 乙金窯跡で生産した須恵器

- ※ 1) そろばん玉のような形をした糸を紡ぐための道具。
- 2) 甌や鍋などの調理具の把手に小さな切込みを持つ土器。
- 3) 土器を棺おけとして使用した墓。
- 4) 竪穴住居の一角に溝が接続するもので、朝鮮半島南西部に特徴的な住居の形。
- 5) 朝鮮半島で一般的に見られる資料で、日本では珍しい形や特徴がある考古資料のことを朝鮮半島系資料と呼ぶ。

#### (4) 乙金古墳群の成立

乙金古墳群は総数100基以上の古墳があり、福岡平野でも有数の古墳群です。善一田古墳群と王城山古墳群を紹介します。

**【善一田古墳群】** 総数約30基からなる古墳群で、全部で8つ程度のグループがあることが分かりました。6世紀後半に築造を開始し、7世紀後半に至るまでの約100年間、4世代前後にわたる一族の古墳群です。



写真21 善一田古墳群全景



写真22 善一田古墳群からの眺望

**善一田古墳群の性格** 新羅系文物が集中することが大きな特徴で、朝鮮半島の新羅<sup>1)</sup>と密接な関係があったことを物語ります。直接的な交流を示す資料として新羅土器がある他、元々は新羅の王族たちの間で流行した刀の飾り金具である三累環頭把頭



写真23 新羅土器



写真24 三累環頭把頭と装身具

などがあります。また、鉄滓を古墳に副葬した例<sup>2)</sup>が複数あることから、鉄器づくりに関わる人たちの古墳群で、薬師の森遺跡に住んだ人々が善一田古墳群を造ったと考えられます。



写真25 ヘラ書き須恵器

**国内最古級のヘラ書き須恵器** 須恵器に「奈」という漢字を記したヘラ書き須恵器が出土していることから、漢字の読み書きをできる人物がいた可能性があります。国内で漢字の使用が一般的になる前の7世紀前半のもので、国内最古級のヘラ書き須恵器の一つです。中国や朝鮮半島の人々と交流・交渉する際に、通訳<sup>つうやく</sup>などで活躍した人がいたのかもしれない。

※1) 当時、朝鮮半島にあった3つの国（高句麗・新羅・百済）の一つ。現在の慶州の地に都が置かれた。

2) 鉄滓供献古墳：鉄器をつくる際に生じた廃棄物を副葬したり供献したりする古墳。



## 乙金地区のランドマーク、善一田古墳群18号墳

18号墳は乙金古墳群のなかでも、最初にして最大の古墳です。6世紀後半に築造された直径約26mの円墳で、同時代の福岡平野で最大級の円墳の一つです。丘陵の先端部に単独で立地しており、遠くからでも仰ぎ見ることができることから、当時は地域のランドマークのような存在であったことでしょう。また、古墳からは大野城市域のみならず福岡平野全域を見渡すことができ、他の古墳とは隔絶した存在感があります。

内部には石を積み上げて造った横穴式石室<sup>よこあなしきせき</sup>（本書表紙・裏表紙）があります。遺体を埋葬する部屋である「玄室」<sup>げんしつ</sup>は高さは3.5mある非常に立派な造りで、一番大きな石は推定10トン以上もある巨石<sup>きよせき</sup>を使用しています。



写真26 18号墳の墳丘



写真27 18号墳の石室

## 時代を切り拓いた英雄、18号墳の被葬者

18号墳からは馬具<sup>ばぐ</sup>、鉄刀<sup>てつとう</sup>、たくさんの鉄鏃<sup>てつぞく</sup>や、鞆<sup>ゆぎ</sup><sup>1)</sup>・胡籜<sup>こ</sup><sup>2)</sup>、鉄鉗<sup>かね</sup><sup>3)</sup>など豊富な品々が副葬されていました。鞆・胡籜といった矢を入れる容器は九州では珍しい希少品で、全国的には地域の最有力古墳に副葬されることがあります。鉄器を作る際の必需品である鉄鉗を副葬する点も大きな特徴です。

副葬品の内容から、18号墳の被葬者は馬に跨る勇猛な弓の名手を想像することができます。また、古墳の規模・立地や鉄鉗の存在から、鉄器づくり職人たちを含む乙金地区の集団を束ねた、地域を牽引するリーダーであったのでしよう。



写真28 18号墳副葬品

- ※1) 矢を入れる容器のうち、背中に背負うタイプのもの。木製の本体部分の上を布で覆い、一部を金属で補強するもので、金属部分と布の一部が発見された。金属に打ち込んだ鉋は錫・銀で装飾したもので、布は高級織物である錦の可能性もある。
- 2) 矢を入れる容器のうち、腰にぶら下げるタイプのもの。木や植物質の本体の一部を金属板で補強するもので、金属部分のみ発見された。金属に打ち込んだ鉋は銀で装飾する。
- 3) 鍛冶（鉄器生産）の際に使用する道具で、熱した鉄を挟むためのもの。

**【王城山古墳群】** 善一田古墳群の南に隣接する、総数約40基の古墳群です。大きく3つのグループがあり、善一田古墳群と同様に6世紀後半に築造を開始し、7世紀後半に至るまでの約100年にわたる古墳群です。

### 国内最多の出土数—新羅土器—

王城山古墳群を特徴づけるのは、多数の新羅土器です。新羅土器は王城山古墳群で10点見つかったほか、善一田古墳群で2点、薬師の森遺跡で1点、乙金地区の北側にある唐山古墳群<sup>からやま</sup>で1点出土しており、全国的にみても新羅土器が最も集中する地域です。

**新羅とは？新羅土器とは？** 新羅とは朝鮮三国時代<sup>けいしゅう しゅうと</sup>にあった国の一つで、現在の慶州に首都がありました。新羅でつくられた土器のことを新羅土器と呼び、土器の表面をスタンプなどで装飾<sup>そうしよく</sup>することが大きな特徴です。



第3図 7世紀頃の朝鮮半島

### どこから運ばれ、何を運んだのか？

乙金地区の新羅土器の中にはいくつか特徴的なものがあります。例えば頸<sup>くび</sup>が太い壺は新羅の首都・慶州では珍しいもので、新羅の中でも首都ではない地域から運ばれた可能性があります。また、土器の表面に渦巻状<sup>うずまき</sup>の文様を貼り付けた壺は、新羅内陸部<sup>テグ キョンサン</sup>の大邱や慶山といった地方に多いものです。これらの資料は新羅土器がどこから運ばれてきたのかを考える上で重要な手がかりといえるでしょう。

乙金地区で出土した新羅土器は全て貯蔵具<sup>つぼ</sup>（壺と壺の蓋<sup>ちよぞうぐ</sup>）です。貯蔵具は物を保管・保存したり、中に何かを入れて運ぶための道具であることから、新羅土器そのものは何かを運ぶための容器として、この地に持ち込まれたと考えられます。結晶<sup>けっしょう</sup>・粉末状<sup>ふんまつじょう</sup>や液体状の物質を運んだものと考えられ、お酒や蜂蜜<sup>はちみつ</sup>、薬品として人参<sup>にんじん</sup>などを運んだのかもしれない。



写真29 乙金地区遺跡群の新羅土器



## 4. 激動の7世紀と乙金地区遺跡群

### (1) 東アジアの動乱と大宰府都城の成立

乙金地区で大規模な開発が行われる7世紀前後は、東アジア全体が激動の時代を迎えていました。中国大陸では589年に強大な帝国・隋が建国し、618年には隋を滅ぼした唐が建国します。朝鮮半島では高句麗・新羅・百済が覇を競う三国時代で、半島統一に向けて熾烈な争いを繰り返していました



第4図 7世紀頃の東アジア

が、660年には唐と連携した新羅が、ついに百済を滅亡へと追い込みました。当時、百済と友好関係にあった日本は、663年に百済救援のため軍隊を派遣しましたが、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫してしまいます。この敗戦を受け、日本では水城(664年)、大野城(665年)といった防衛施設を相次いで築造し、大宰府都城の整備を進め律令国家成立に向けて国家体制が整備されていくこととなります。

ちょうどこの頃、乙金地区でも大きな転機を迎えることとなります。集落では遺構・遺物量が激減し、ほとんど人がいなくなったと考えられます。また、乙金古墳群では7世紀前半にピークを迎えた後、7世紀中頃～後半にはしだいに古墳が造営されなくなります。ただし、7世紀後半までは古墳にかわり土坑墓<sup>1)</sup>が造られたり追葬<sup>2)</sup>や墓前祭祀<sup>3)</sup>をしていることから、乙金地区の集団はどこか別の場所へ移住し、生活していた可能性があります。こうしたことから、当地の集団が大野城築造に関わったと考えることができます。



写真30 乙金地区遺跡群と水城跡・大野城跡

※1) 地面に穴を掘っただけの素掘りの墓。2) 既にある古墳に対して、改めて別の遺体を埋葬する行為。

## (2) 乙金地区遺跡群と四王寺山（大野城跡）の関係を語るもの

乙金地区は665年に築造された大野城跡に近接した遺跡群の一つです。ここでは、考古資料・古文書や乙金地区の立地に注目し、大野城跡との関係性を探ってみたいと思います。

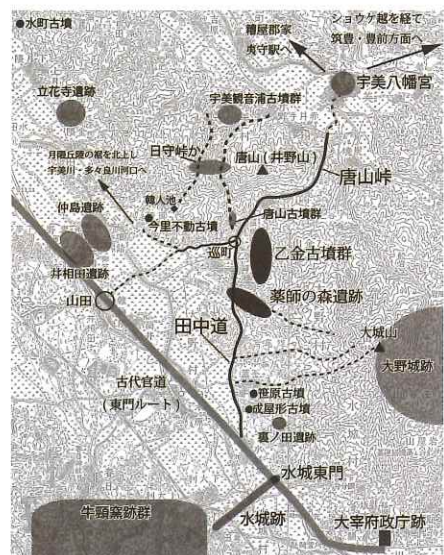
**四王銘瓦** 薬師の森遺跡では、「四王」という漢字を押し印した瓦が複数見つかっています。本来、四王銘瓦は774年に四王寺山頂に置かれた四王寺（四王院：現在の毘沙門堂付近）に葺かれた瓦と考えられており、薬師の森遺跡の住人が四王院に詣でた際に四王銘瓦を持ち帰ってきたのかもしれない。



写真31 「四王」銘瓦

**古地図に描かれた道** 1806年に作成された太宰府旧蹟全図には四王寺山頂の毘沙門堂から西（薬師の森方面）に伸びる道が描かれています。また明治33年の地図には四王寺山頂付近から西に派生する道が数本伸びており、1本は釜蓋方面、1本は雉子ヶ尾方面、そしてもう1本は薬師の森遺跡方面へと通じています。以上のことから、江戸・明治時代には薬師の森遺跡の場所から四王寺山頂へとアクセスする道があったと考えられます。

**田中道と唐山峠** 薬師の森遺跡の西端部をかすめるように南北に伸びる道があります。通称「田中道」<sup>1)</sup>と呼ばれ、乙金南部の丘陵地を経て県道112号線（旧日田街道）に接続し、ほどなく水城東門へと到達します。また「田中道」の北端部にあたる「巡町」から宇美町井野に通じる峠は「唐山峠」と呼ばれ、粕屋平野を経て筑豊地域、豊前方面へ通じるルートは福岡側の基点となります。「田中道」「唐山峠」と連続するルートは粕屋平野から大宰府へと至る最短ルートであり、古来より交通の要衝であったことを物語ります。



第5図 交通の要衝としての乙金

以上、乙金地区の立地は福岡平野と粕屋平野を結ぶ重要な場所であるとともに、大野城・大宰府といった古代の政治・軍事的拠点との関係で重要な位置を占めています。また、乙金の集団は大野城の築造に関わった可能性があることから、乙金地区遺跡群を「大野城のお藤元」と呼ぶこともできるでしょう。

※1) 筑後藩主田中吉政の参勤交代のためにつくらせた道といわれる。



## 5. 律令社会の成立と役人たちの姿－奈良時代～平安時代前期－

奈良時代には律令制<sup>りつりょうせい</sup>という法律や官僚組織<sup>かんりょうそしき</sup>を整備した国家体制が整っていきます。薬師の森遺跡では7世紀中頃にいったん途絶えた集落が、8世紀中頃～後半になると再び集落を形成します。掘立柱建物<sup>とだ</sup>・竪穴住居や井戸のほか、須恵器窯跡<sup>かじろ</sup>や鍛冶炉も発見されており、古墳時代に乙金地区に居住した人々の子孫たちがこの地に戻ってきたことを物語ります。越州窯系青磁<sup>えっしゅうようけいせいじ</sup>など初期<sup>ぼうえきとうじき</sup>の貿易陶磁器<sup>1)</sup>や製塩土器<sup>せいえんどき</sup>、硯<sup>すずり</sup>などが出土したり、大型の建物があることから、一般的な集落ではなかった可能性があります。ここでは、出土遺物を手がかりに奈良時代を中心とした乙金地区の性格について見ていきます。



写真32 越州窯系青磁



写真33 掘立柱建物

ヘラ書き須恵器「多来」の謎 薬師の森遺跡では「多来」という漢字が記さ

れた8世紀後半の須恵器が出土しました。「多来」の意味は、那珂郡<sup>なかくん</sup>にあった村「田来郷<sup>たくごう</sup>」<sup>2)</sup>を意味すると考えられ、田来郷の所在地を牛頸<sup>うしくび</sup>周辺に求める説があります。ところが、乙金地区は古代の御笠郡<sup>みかさぐん</sup>（大野郷の可能性）にあたり、郡・郷とも異なることから、謎は深まるばかりです。いずれにしろ、奈良時代の乙金には漢字の読み書きができる人がいたことを物語るとともに、乙金と牛頸がなんらかの関係性を持っていたことが分かる資料として重要です。



写真34 ヘラ書き須恵器「多来」

古代のベルトと有力者の存在 最も注目されるのが、鉸具<sup>かこ</sup>と呼ばれるベルトのバックルと飾り金具です。奈良時代には位階制度<sup>いはいせいど</sup>という身分制度が整えられ、官人<sup>かんじん</sup>（役人）たちは位階に応じた衣服・装身具を身に着けることが義務付けられました<sup>3)</sup>。古代の薬師の森遺跡には立派なベルトを腰に巻いた、下級官人もしくは郡司や郷長（村長）クラスの人物が居住していた可能性があります。



写真35 青銅製鉸具と石帯

また、この地域一帯は、奈良時代の「大野郷」にあたる可能性があり、古代山城「大野城」や現在の「大野城市」のルーツと呼ぶこともできるのかもしれませんが。

※1) 主に中国から輸入した陶磁器。

2) 715年に定められた古代の行政単位。

3) 鉸具については位の高い五位以上の官人は「金銀装腰帯」、六位以下の下級官人は「烏油腰帯（くろつくりようたい）」を身に着けることが定められている。薬師の森遺跡の鉸具は青銅製であり、「烏油腰帯」の可能性がある。

## 6. 再び大開発の時代－平安時代後期～鎌倉・室町時代－

律令社会が崩壊し武家社会へと変化していく平安時代の終わり～鎌倉時代のはじめ頃になると、乙金地区では再び大開発の時代を迎えます。薬師の森遺跡を中心に、区画溝で囲まれた「居館」が営まれたり、中国からの輸入陶磁器を副葬した墓が見つかっています。まずはこの発端となる経塚の造営についてみていきましょう。

### (1) 未来へのタイムカプセルー古野遺跡経塚・経筒ー

平氏が活躍した12世紀前半、古野遺跡では経塚が造営されました。経塚とは本来、お釈迦様しゃかの教えを後世に伝えるため、仏教の経典きょうてんを地中に納めた遺跡のことです。古野経塚は乙金宝満神社裏の非常に見晴らしの良い小高い丘の上に造られていました。奇跡的にも未盗掘の状態で見つかり、経塚の内部には、経筒が納められていました。

次項で紹介するように、乙金地区では12世紀中頃～後半以降に薬師の森遺跡が大規模

化することから、古野遺跡経塚の造営は、開発を推し進める上での大きなイベントであったのかもしれませんが。



写真36 経筒出土状況

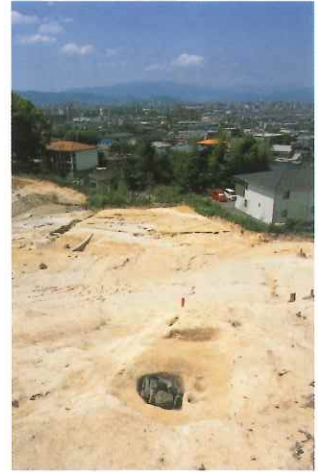


写真37 古野遺跡経塚



写真38 経筒

経塚に納められた経筒は青銅製の铸造品で、四王寺山中でたくさん発見されている「四王寺型」と呼ばれるものです。X線CTスキャナにより経筒内部の様子を撮影したところ、10巻のお経きょうが納められていることが判明しました。また、経筒の底には鳥やトンボの文様を表現した和鏡わきょうをはめ込んでおり、美術的な価値も非常に高い資料といえます。



写真39 経筒にはめ込んだ和鏡



写真40 経筒に納めた経巻



## (2) 中世の開拓者たち—居館と高階層墓の展開—

**居館** 古野遺跡で経塚が造営された直後の12世紀中頃～後半には、薬師の森遺跡の広範囲で集落の形成が活発化します。集落は掘立柱の建物や井戸などの居住施設を方形の溝で区画した「居館」と呼ばれるものです。薬師の森遺跡ではこうした居館が同時多発的に複数営まれました。



写真41 薬師の森遺跡の居館

**墓** これら居館を営んだ人々が葬られた墓もたくさん見つかっています。当時、貴重品であった中国の輸入陶磁器を副葬することから、比較的裕福な人や高い階層の人が葬られたと考えられます。基本的には1～数点の陶磁器を副葬しており、なかには7点の青磁を副葬した木棺墓<sup>もつかんぼ</sup>もあります。陶磁器類は全国屈指<sup>ぼうえきとし</sup>の貿易都市であった「博多」や政治的・宗教的な中心であった大宰府を通じて入

手したものと考えられ、都市部との頻繁な交流があったことを伝えます。陶磁器を副葬した墓は大野城市域では乙金地区に最も集中しており、福岡



写真42 薬師の森遺跡の中世墓



写真43 中世墓に副葬した青磁

平野全体でみてもこれだけの高階層墓が集中する地域は珍しく、当地の人々が開発に成功し、大きく飛躍したことを物語ります。

**開発の痕跡** 薬師の森遺跡ではこの時代の水田跡が見つかっており、大野城市域では初めての発見となりました。また、薬師の森遺跡の水田に水を引くための人工的な水路跡もあることから、大規模な土木工事が行われたことが分かります。このように、経塚の造営をきっかけに乙金地区の人々は土地開発に成功し、武士が台頭する時代に大きく成長していったのでしょう。



写真44 中世の水田



写真45 大規模な水路跡

## 7. 今に残る江戸時代の文化財と風景－近世～近代の乙金村－

乙金村の始まり 「乙金」が古文書に登場するのは1523年、室町時代のことで、この地が<sup>おおうちしかしん</sup>大内氏家臣である<sup>すふし</sup>周布氏の<sup>しよりょう</sup>所領であったことを伝えます。乙金地区では16世紀～江戸時代の明確な集落遺跡は見つかっておらず、室町時代終わり頃には現在（区画整理前）の集落と同様の場所、つまり乙金公民館<sup>しやうえいじ</sup>周辺や正栄寺周辺に集落が営まれたと考えられます。人口は幕末の1858年で263人（43戸）だったことが分かっています。

乙金宝満神社 創建は1595年と伝えられています。当初は今よりも低い場所にあったといわれ、<sup>げんろく</sup>元禄年間（1688～1703年）に現在の地に移されたようです<sup>1)</sup>。区画整理前はうっそうとした木々に覆われ、江戸時代の空気が漂う空間でした。

<sup>はいてん</sup>拝殿には、博多の<sup>まちえし</sup>町絵師・<sup>むらたとうほ</sup>村田東圃が1831年に描いた市内最古の<sup>えま</sup>絵馬「<sup>なご</sup>夏越し<sup>ぼら</sup>払い<sup>ぎ</sup>祇園<sup>おんおど</sup>踊りの<sup>かか</sup>絵馬」（大野城市の指定文化財）が掲げられていました。

<sup>きんせいぼ</sup>近世墓と<sup>きんせいぼ</sup>享保子丑<sup>きんせいぼ</sup>餓死<sup>きんせいぼ</sup>枯骨<sup>きんせいぼ</sup>塔 原口遺跡・古野遺跡など複数の遺跡で江戸時代から近代にかけての墓地がみつかっています。<sup>ぼひ</sup>墓碑<sup>めい</sup>銘の調査から、それぞれの家系がひとつの墓地を数世代にわたり営んだことが分かりました。なお、高原家墓地には<sup>きやうほうわうし</sup>享保子丑<sup>がしこつとう</sup>餓死<sup>みぞう</sup>枯骨<sup>だいきん</sup>塔<sup>えきびやう</sup>があります。江戸時代中頃、未曾有の大飢饉と疫病により、全国で多数の死者が出ました。当時、<sup>りせい</sup>里正（村長）であった高原善一郎氏が<sup>むえんぼとけ</sup>無縁仏となった人々の骨を集めて埋葬し、100年後の<sup>てんぼう</sup>天保年間にひ孫の高原善蔵氏が建てた<sup>くようとう</sup>供養塔がこの<sup>きんせいぼ</sup>枯骨塔です。

<sup>きんせいぼ</sup>幕末・明治の乙金村 幕末の動乱期、<sup>さんじやうさねとみ</sup>三条美美ら<sup>そんのうじやういは</sup>尊王攘夷派の<sup>くぎやう</sup>公卿たちが幕府により京都から追放され（七卿落ち）、このうちの5人（五卿）は太宰府に移されます。乙金村の高原謙次郎氏（明治元年に大庄屋に就任）は<sup>きんのうしし</sup>勤皇志士の<sup>つきがたせんぞう</sup>月形洗蔵らとも交友があり、五卿ともたびたび面会し、三条美美も密かに高原家を訪れていたことが知られています。

また、幕末～明治時代の乙金村には<sup>てらこや</sup>寺子屋があったという記録があります。当時、乙金村組頭であった<sup>くみがしら</sup>関忍平氏の<sup>せきにんべい</sup>墓石碑文の調査から、村の子供たちに<sup>がく</sup>楽（楽器か？）や読み書き、算術（算数）を教える寺子屋を開いていたことが裏付けられました。



写真46 乙金宝満神社



写真47 享保子丑餓死  
死枯骨塔

※1）祭神は応神天皇・神功皇后・玉依姫命を祀る。玉依姫命は海神・豊玉彦の娘であり水分神であることや境内には八大龍王も祀ることから、「水」にまつわる神社と考えられる。



## 8. 戦争遺跡から平和を思う - 太平洋戦争と乙金村 -

九州飛行機と地下疎開工場 ざっしよのくま 雑餉隈の地、現在の JR 南福岡駅の近くには、1930年～1945年にかけて、九州飛行機という航空機メーカーがありました。太平洋戦争末期の昭和20年、本土決戦に備えて工場疎開が始まり、雑餉隈本工場にあった機械工場・板金工場・仕上げ工場が乙金の丘陵地帯の地下に工場を移したといわれています。

王城山遺跡発見の地下疎開工場 乙金地区では、太平洋戦争末期の防空壕を複数発見しました。王城山遺跡で発見した防空壕は規模や出土遺物から地下疎開工場の跡と考えられ、全国で初めての発掘調査事例となりました。東西50m、南北35mを平面コ字形にトンネル状に掘りこんだ地下壕で、内部の幅・高さは3mもあり、板材と丸太材で壁面と天井を補強しています。

床面にはコンクリートを打設し、「マグネチック



写真48 王城山遺跡の「地下疎開工場」



写真49 地下疎開工場の内部

チャック」など金属加工用の工作機械類が並び、金属製品や飛行機の本製部材を製造したようです。王城山遺跡の地下壕で出土した木材（写真52）と同様のものは、九州飛行機で製造された零式水上偵察機に使用された可能性があります。



写真50 工作機械「マグネチックチャック」



写真51 工作機械



写真52 飛行機の部材

戦争遺跡が語るもの 乙金地区の防空壕で発見した資料に「敵国降伏」と記されたお皿があります。管崎宮が製作したもので、元寇の際にかめやまじょうこうが「敵国降伏」を祈願したことにあやかったものと考えられ、当時の緊迫した情勢を伝えます。乙金地区の戦争資料は、たった数十年前にあった悲惨な歴史を如実に語るもので、平和の尊さを改めて考えさせられます。



写真53 「敵国降伏」押印の皿



写真54 皿の細部

## おわりに－次へのはじまり－

乙金地区遺跡群の発掘調査は、平成19年度に開始してから10年の歳月をかけ、平成29年度に全ての発掘調査・報告書刊行を完了しました。広大な面積を発掘調査したことにより、多くの知見と、遺跡から見た地域の歴史を豊かに語るのに十分な資料を得ることができました。また、幸運なことに善一田古墳群の一部を現地で保存することとなりました。

乙金地区では1万年以上にわたり人々の営みが繰り返されてきました。この長い歴史の中には、豊かな営みを伝えるもの、激動の時代を語るもの、未来への願いを込めたものや、悲惨な歴史の爪あとを残すものなどがあります。遺跡の発掘調査を通じて何よりも感じたことは、過去に様々な営みがあったこと、その営みは途絶えることなく連綿と続いていたこと、喜び悲しみ苦しみながら生き抜いた人々がいたこと、その上に今の生活がありさらに未来へとつながっていくこと、そして我々もまた歴史の中に生きている、ということです。

地下に埋もれた遺跡に意識を向けるだけで、過去に生きた人々から勇気もらい、日々の生活に彩りを与え、より豊かな未来を築いていけるような気がします。

区画整理事業により新しい街が誕生しました。これから先、この新しい街ではどのような暮らしが始まり、どのような歴史が重なっていくのでしょうか。



写真55 区画整理前の航空写真  
(平成19年度撮影)



写真56 区画整理後の航空写真  
(平成29年度撮影)



大野城市の文化財  
第48集

平成30年 3月30日 発行  
平成31年 3月18日 二刷

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町 2丁目 2番 1号

印刷 九州コンピュータ印刷  
福岡市南区向野 1丁目19番 1号

